研究タイトル：

近代における日本建築の伝統解釈について

氏名：	三島 雅博 ／ MISHIMA Masahiro	E-mail：	mmishima@toyota-ct.ac.jp
職名：	教授	学位：	博士（工学）
所属学会・協会：	日本建築学会		

キーワード：	近代和風建築，万国博，日本館，鈴木幸右衛門
技術相談 提供可能技術：	・建築史，文化財 ・建築景観，町並み調査 ・近代和風建築の調査

研究内容：

明治期における近代和風建築を通して、当時の日本人の美意識を研究している。
特に万国博で建てられた日本館や明治期に名古屋で活躍した大工棟梁鈴木幸右衛門の業績を具体的な研究題材としている。
万国博に建てられる日本館は、海外に向けての日本人の建築的美意識の発露と考えられ、その造形には様々な人物が関わっていた。特に初期は、建築学の分野が高度なレベルに達していなかったので、美術分野や政治経済分野のオピニオンリーダーと言える人物がその造形を導いていた。しかし、明治も中期を過ぎると建築学も高度なレベルに到達するようになり、建築学者がその造形を導くようになっていった。その時に重要なのは、それらの建築学者の捉えていた日本建築の理想的な美である。これは、建築造形の理念と同時に、どの時代の建築をどのように評価していたかという各時代の造形に対する価値観も影響しており、興味深い。
名古屋の大工棟梁第五代鈴木幸右衛門は、尾張藩の大工であったが明治の時代の到来とともに民間や公共建築に携わるようになる。特に明治初期には、公共建築の建設に関わるようになることで、洋風建築も建てるようになっていく。しかし、明治20年代からは公共建築が減ることにより洋風建築に携わることが殆どなくなっていった。この時に鈴木幸右衛門の主要な建築課題となっていくのは神社建築などの和風建築である。特に興味深いのは、それまでになかった種類の和風建築を手がけるようになることである。例えば明治38年の日露戦争終結時の凱旋門の多くは洋風に造形されることが多かったが、鈴木幸右衛門はそれを和風で造形しているし、明治43年の関西府県連合共進会に建てられた迎賓館は、金閣銀閣をモデルとした新しい和風建築の造形とするといった具合である。これらの鈴木幸右衛門の和風の造形には、伝統的な大工棟梁が洋風に進むだけでなく、和風建築を新たな段階に進める試みを示しており、大変に興味深い。

提供可能な設備・機器：

名称・型番（メーカー）	